

花川病院

症 例 概 要 患者氏名：S氏（70代 女性）

【病名】：右橋梗塞 障害名：左片麻痺、構音障害

【入院期間】：平成30年5月初旬 ～ 平成30年9月下旬

【経過】：H30年4月初旬眩暈を自覚。呂律不全、左上肢脱力も伴っていたが様子を見ていた。夜間入浴中に転倒し頭部を強打。翌日、夫が異変に気づき救急搬送。右頭頂部硬膜下血腫、右橋梗塞、多発性ラクナ梗塞の診断。保存的に加療。5月初旬リハビリ目的にて当院へ転院。

【既往歴】：糖尿病、高血圧、高脂血症、後腹膜腫瘍摘出術、

下行結腸切除術、小腸 人工肛門造設術（既に閉鎖）、卵巣嚢腫

【病前の生活】：夫と二人暮らし。家事やADLはすべて自立。趣味はボーリング。

【本人の希望】：家事をやりたい、歩けるようになりたい。

内 容

【経過】

入院時、麻痺側上下肢の管理が不十分だったため基本動作は軽介助から見守りを必要とし、歩行は平行棒や歩行車を使用し短距離は軽介助レベルで可能だが、失調および支持性の低下により体幹・下肢の動揺を認め不安定さが著明だった。手指の集団屈曲・伸展はわずかに可能な程度だった。麻痺側上肢の使用はほぼ見られず日常生活動作全般に一部介助を必要とした。高次脳機能は注意障害を認め、摂食嚥下機能面は、前院では少量の誤嚥があったため経管栄養で経過していた。

訓練開始時は、旦那様のお仕事の関係もありショートステイ等の利用と福祉用具を使用した生活での自宅退院を想定し、ご本人も今後の生活や身体状況に関する不安が多く聞かれ落ち込んでいる印象を強く受けました。

体幹・下肢に対しては、安全懸架装置、免荷トレッドミル、視覚的フィードバックを目的としたWelWalkを回復過程・課題難易度に合わせて使用し、3ヶ月で杖歩行自立、4ヶ月で独歩自立となった。屋外の移動は杖を使用し500m程度可能となった。上肢・手指に対しては当院入院10日目で機能的電気刺激装置（MURO Solution）治療開始、41日目から3週間のHANDS療法を開始した。治療開始直後から上肢・手指の機能改善を認め、HANDS療法終了後には手指の分離運動が可能、4ヶ月にはADLが自立し、退院前には病前の主婦としての役割獲得のため、積極的に家事動作訓練を取り入れていきました。摂食機能面は、入院時のVFで誤嚥を認めず、順調に形態をアップし安定した自力摂取が可能となった。

これらにより本人や旦那様の安心へ繋がり、平成30年9月下旬に自宅へ退院した。退院 3日後から当院の訪問リハビリを開始し、旦那様の不在時には主婦としての生活を確立されている。

重度の運動麻痺と体幹・下肢の失調および支持性の低下がありながらも、先進機器を有効活用したりリハビリテーションを提供できたこと、チームアプローチを行うことで本人の希望である自宅退院し役割である家事動作獲得を実現することができた症例である。

【入院時と退院時の評価】 FIM：58/126点→122/126点